常葉大学教育学部紀要（教育学部）
第35号　　2015.3.　　１頁～　17頁

近世富士山信仰の展開（二）

―北遠地域（春野町・水窪町・佐久間町）を対象として―

The Development of the Worship of Mt. Fuji in Modern Times (2)
― A Case Study of Haruno-cho, Misakubo-cho, and Sakuma-cho―

天　野　　忍
Shinobu AMANO

（平成二十六年十一月二十日受理）

はじめに

昨年度、北遠地域における近世富士山信仰の展開について、春野町を対象に、戦国期から江戸初期にかけての道者帳や地元に残る古文書、伝承などを基礎資料として、近年における研究の諸成果を取り入れながら、現地を調査し、その概要を教育学部の紀要三十四号にまとめた。

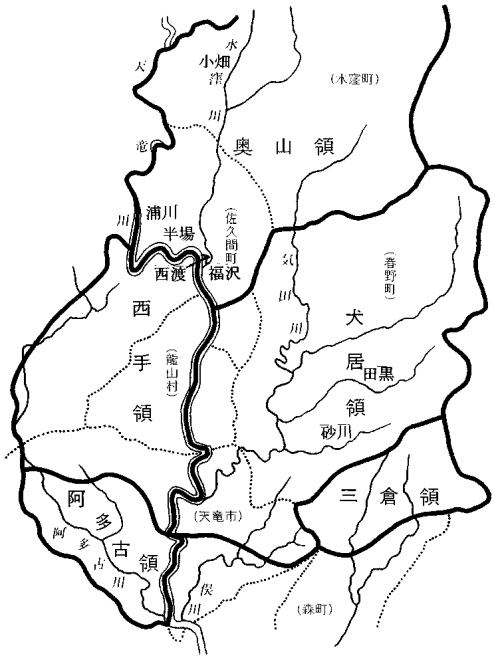
そこで、本稿では、残された春野町の一部の地域を手始めに、範囲を拡大して、水窪町・佐久間町を主な対象とし、調査した成果をまとめる。

本地域は、青崩峠を信濃との境とし、赤石山脈に沿って南北に信州街道（秋葉街道）が連なる。龍頭山や山住山など、古くから山岳信仰が盛んで、安産や子育に関わる山姥伝説が伝わる。南信濃（長野）や奥三河（愛知）の地域とも接していて、日常生活でのかかわりが深い。特に、田楽や花の舞など、三遠南信地域を一つの文化圏とする特色ある文化財が豊富である。

このようななかで、戦国の末あたりから広まりをみせた富士山信仰が、いかに展開されてきたのか、を明らかにすることが本稿の課題である。

図1は、前号に掲載した部分を除く春野町の一部、及び水窪町と佐久間町における、富士山信仰の分布が明らかな地域名を示した図である。『春野町史』通史編上巻の、北遠地方の「領」の図に、本稿に合わせて地域名を加筆した。

図1　北遠における富士山信仰の分布図



一　春野町域における富士山信仰（続）

（一）地名「いぬいをくの山」

前号に、戦国期の「御炊坊道者帳写」（『浅間文書纂』所収）に見える遠江国富士参詣村々の一覧を掲載した。そのなかで、春野町域に関わる「いぬい」「すき」「かわかみ」「けたおくの山」「いぬいをくの山」などの地名を検討したが、「いぬいをくの山」については、春野町と比定するのみで、検討は充分でなかった。

そこで、あらためて「いぬいをくの山」の地名について検討することとする。

「いぬい」は、道者帳のなかで明らかに「いぬいをくの山」と区別されて表記されている。「いぬい」は、中世天野氏の館跡に鎮座する熱田神社を中心とする堀之内の地域（江戸時代、堀之内村を構成した市場・若身平・谷地・明日野・人草・船木・平尾・平野・小奈良安・横根の一〇の集落からなる）にあたる。「すき」は杉村の地域、「かわかみ」は川上村の地域と比定できる。「けたおくの山」を「気多の奥の山」と読めば、植田・石切・勝坂あたりとなる。これらの地域では、富士山信仰の伝承が確認されている。

「いぬいをくの山」について、「気多の奥の山」と同じく、「犬居の奥の山」とすれば、春野町の南端部に位置する犬

居の地から見て、「気多の奥の山」を除く奥の山の方面、と読めるのではないか。漠然とした表記であるため、地域を特定することは難しいが、想像を逞しくすれば、「いぬいをくの山」は、堀之内の周辺地域や熊切方面となるのではないか、と考える。このうち、堀之内の周辺地域と想定される地域では、富士山信仰の存在が明らかでない。従って、残りは熊切方面となる。

次に戦国期の古文書を検討する。永禄十二年（一五六九）正月、徳川家康が犬居の天野宮内右衛門尉らに与えた判物（『春野町史』資料編一）に、「今度依合忠節出置本知之事」として、「一、犬居参ケ村・雲名・横川　都合五百貫文」とある。このうち、雲名・横川（旧天竜市内）は、今川時代、天野氏が代官を勤めた地域である。また、同年閏五月、徳川家康が熊切郷胡桃平に本拠を置く天野氏同心の渡辺三左衛門尉に与えた知行安堵状に、「今度宛行犬居之内本知行之事」として、「気多之内上石切、河内、竹之内、熊切之内伊佐賀」とある（『春野町史』資料編一）。

これらのことから、戦国時代において、現在の春野町域を示すうえで、「犬居参ヶ村」「犬居之内」などの表記が使われ、「犬居参ケ村」とは、犬居・気多・熊切の三か村から構成されていたことが知られる。江戸時代の古文書や棟札などにおいても、「遠江国周智郡犬居郷堀之内村」「遠江国周智郡犬居郷気多村」、「遠江国周智郡犬居郷熊切村」などと表記され、犬居の名は、気田川流域の広い地域名を示す語として使用されているのである。

図1にあるように、江戸時代には、行政区域として「犬居領」の表記が使われている。

（二）熊切の富士山信仰

①石打松下蛭子神明神社の棟札

「いぬいをくの山」の地域について、これを熊切村の地域とすると、富士山信仰の存在を示す資料の確認が一つの決め手となる。その資料として、杉・川上地区を除く石打松下の蛭子神明神社と砂川の八坂神社に収蔵されている棟札が挙げられる（『春野町の社寺棟札等調査報告書』）。

蛭子神明神社の富士浅間社に関する棟札は、もと田黒村字トメ山に鎮座した天神・富士浅間両社の貞享三年（一六八六）・文化一三年（一八一六）・明治七年（一八七四）のものである。天神・富士浅間両社は、明治六年（一八七三）に田黒の神明社に、次いで昭和三年（一九二八）に神明社が石打松下の蛭子神社に合祀された経緯がある。しかし、蛭子神明神社の宮司を勤める島沢計宏氏（昭和二十四年生まれ）によると、富士山信仰に関する伝えは明らかでないという。

②砂川八坂神社の棟札

本年九月、本学教育学部の社会専攻四年のゼミ学生八名とともに、砂川八坂神社や高塚山などを訪ね、富士山信仰の実態について調査した。八坂神社では、宮司原山克己氏のお祓いを受けて正式参拝し、地元の藤田和正・溝口初之丞両氏の御協力を得て、本殿収蔵の棟札を拝見することができた。

それによると、慶長五年（一六〇〇）の牛頭天王・富士浅間宮造立棟札を最古とし、寛永九年（一六三二）・慶安元年（一六四八）・元禄七年（一六九四）・宝暦四年（一七五四）・安永三年（一七七四）・天明七年（一七八七）・文政二年（一八一九）・天保十四年（一八四三）・明治七年（一八七四）の札が保管されていることが明らかとなった。江戸時代から明治初年にかけて、ほぼ継続的に村人たちによって社殿が造営され、富士山信仰が伝えられてきたことの証である。

これらのことから、「いぬいをくのやま」の地域とは、富士山信仰の由来が明らかな砂川あたりを指しているのではないか、と考える。先に挙げた渡辺三左衛門尉宛徳川家康安堵状に見える「熊切之内伊佐賀」とは、「犬居の内、熊切村の砂川」のこととなる。慶長五年雪月は、天下分目の関ヶ原の戦いの直後である。徳川家康の天下が明らかとなった時期であり、峯・南沢・徳瀬・沢頭・赤土の殿原衆たちが中心となり、「現世安穏・後世善処」を求めて多くの村人たちの奉加を得、牛頭天王・富士浅間を祀ったのであろう。

しかし、この時期、初めて富士山信仰を受入れたのではなく、戦国以来の長い信仰の歴史があったことは、想像に難くない。

③薬師如来像の祭祀

明治十六年（一八八三）六月の「静岡県周智郡砂川村神社明細取調簿　村社八坂神社」の由緒書（概要）によると、

牛頭天王・富士浅間は、養老年度の勧請で、明徳の頃迄、高塚山に鎮座。神体木像を安置して祭祀を実施。その後、野火に逢って消失したため、残った神像を現在の八坂神社に移し、高塚山の旧跡には、山神・大日・不動を祀った。

とある。

養老年度の勧請や明徳の頃迄の鎮座について、詳細は明らかでないが、おそらく修験者たちの高塚山における祭祀の歴史を伝えていよう。

由緒に記された神体木像とは、何か。これについては、八坂神社本殿左脇にある小祠の厨子内に安置されている仏像が参考となる。

高さ三〇㎝ほどの木造の仏像は、痛みがひどいが、右手

は施無畏印、左手で薬壺を持つ御姿から、薬師如来像と認められる。昭和五十二年八月、総代の鈴木彦司・藤田家宏・花島茂久の三氏が記した本像発見の経緯によると、

木像は、養老年間（七二〇）の作で、もと高塚山の山頂に鎮座。明徳年間（一三九〇）に火災に逢い、木像のみ持出されて八坂神社に合祀され、今日に至る。慶長五年、八坂神社は現在地に再建され、昭和二十八年、社殿新築。昭和五十二年、屋根葺替の折、発見されて祀られることとなった。

とある。前半部は、前掲の神社明細簿の由緒に基づく内容であるが、後半部は、社殿造営と木像発見の経緯を伝えていて興味深い。

昭和五十一年、春野町大時の河村義忠氏は、砂川の藤田家宏氏の案内を得て調査し、富士浅間と薬師如来との関わりを『温故知新』一〇号にまとめている。

平安時代から明治以前まで行われた神仏習合の思想では、牛頭天王の本地仏として薬師如来が信仰され、須佐之男命は牛頭天王の垂迹神として祀られてきた。東方瑠璃光世界を守護する薬師如来は、病気平癒を司る仏として尊崇され、牛頭天王を疫病退散の神とする祇園信仰が盛んであった。

明治初めの神仏分離により、祭神が須佐之男命と替り、社名も八坂神社と改められた。拝殿には、神社の由来書のほか、明治二十六年（一八九三）春、熊切村砂川の片桐善十郎が奉納した須佐之男命八俣大蛇退治と木花開耶姫命御姿を描く二枚の絵馬が掲げられている。

これらのことから、薬師如来像は、後世、牛頭天王の本地仏として祀られ、明治初年の神仏分離に際して、廃されたのではないか、と考える。屋根裏から発見されたという話は、このような事情をよく伝えていよう。

④高塚山の大日如来と不動尊

高塚山は、八坂神社の後方、標高六六〇ｍを数える円錐形の山である。その山容は、まさに神の降臨を仰ぐにふさわしい神奈備型をなしている。ひときわ目立つ存在で、春野の各地から眺望することができる。

山頂には、隆起した岩肌を削り取って建てた小祠があり、中に石造の不動尊が安置されている。祠の周りには、数個の自然石が配されて祀られている。これは、前掲の神社明細簿の由緒書に、「高塚山の旧跡には、山神・大日・不動を祀った」とある記事と符号するのであろう。

地元の歴史に詳しい溝口氏によると、かつて御嶽行者が護摩を焚いて祀ったという。その唱詞は、

南無帰命頂礼、南無大日大聖不動明王
南無八大童子
慧光童子

慧喜童子
阿のく達多童子
指徳童子
烏倶婆低童子
清浄童子
矜羯羅童子
制叱迦童子

である。現在は、祭典日の一月二十八日と十月二十八日、砂川の東組・中組・西組・赤土組の四組が交替で宿組となり、祀っているとのこと。この不動尊は、溝口氏の守り仏でもあって、酒の他に、白米に小豆を混ぜて供えるという。

前掲の河村氏の報告では、藤田家宏氏の談として、かつて中組の力持ちの男が、山裾の不動川より石造の不動尊を一人で担ぎあげた、との話を紹介する。そして、河村氏の祖父が語る昔話として、琵琶湖の土を富士山に運ぶ途中、少し土がこぼれてしまい、その土が高塚山となったのだ、という興味深い話を伝えている。

溝口氏は、高塚山には富士山信仰に関わる話は伝わっていないといわれる。しかし、河村氏祖父の語る昔話は、荒唐無稽な話として、簡単に片付けるわけにはいかない要素を持つ。

『村山浅間神社調査報告書』は、富士垢離伝承地として、滋賀県甲賀郡や三重県度会郡などの事例を挙げる。これらの地域の集落には、浅間さんと呼ばれる江戸期造立の石造の金剛界大日如来像が祀られており、現在も石仏を巡って行われる富士垢離祭りや浅間山祭りの様子を詳しく紹介している。そのなかで、これらの祭りは、かつて富士参詣を差配した富士宮の村山修験の影響を受けて生まれ、やがて現世安穏や家内安全といった地域の人々の願いとも結びついて在地化したとする。そこでは、富士参詣の前提として精進潔斎が行われ、垢離をとることで富士参詣と同じ御利益を得ようとする人々の願いが根底にあったという。

これらの事例を参考に、あらためて高塚山の山頂に立ってみると、垢離をとった人たちが、高塚山に登って山神・大日・不動を祀り、富士参詣の御利益を得ようとして富士講を伝えていたのではないか、と想像されるのである。

砂川の西沢は水量が豊富な沢で、山の中腹に清滝不動が祀られている。おそらく、ここの滝で垢離をとったのであろう。

高塚山の山頂からは、はるか東方の彼方に富士山頂を望むことができる（写真1）。山深い地域にあって、信仰の対象である富士山を遥拝することにより、人々の信仰心は一層深まったことであろう。

写真1　高塚山から富士山頂眺望（二月の晴天の日、ズームで撮影）

二、水窪町域における富士山信仰

（一）地名「をはた」と「おくの山」

「御炊坊道者帳写」のなかに、富士参詣を果たした北遠地方の村々として、「いぬい」・「よこやま」・「おくの山」・「をはた」・「ひらくち」の名が続く。「いぬい」は、前述のとおりであり、「よこやま」は、浜松市天竜区の横山、「をはた」は、同区水窪町奥領家の小畑、「ひらくち」は、同市浜北区の平口に比定できよう。

このなかで、「おくの山」とは、どの地域を指しているのか、明らかでない。「御炊坊道者帳写」には、前述の「けたをくの山」（気多奥の山）・「いぬいをくの山」（犬居奥の山）の他に、「いのおくの山」の表記がある。これは「井の奥の山」のことであり、浜松市北区引佐町の奥山に比定できる。明らかに「おくの山」とは異なる表記である。また、同資料には、浜松市天竜区佐久間町の浦川と比定できる「うらかわ」の名も見える。

これらのことから、「よこやま」と「をはた」に挟まれた「おくの山」とは、おそらく、中世、山香庄奥山郷と呼ばれた地域（水窪町・佐久間町）を指しているのではないか、と考える。因みに、この地域は、図1にあるように、江戸時代には奥山領と呼ばれていた。

（二）小畑の子安神社

①「をはた衆」と「おくの山殿」

「御炊坊道者帳写」では、ほとんどの表記が村名・地域名となっているが、一部に「をはた衆」・「はんた衆」のように、特別に衆の一字を付した表記が見られる。

衆は、集団をなした人間に対してのみ用いる語である。例えば、戦国時代の事例として、遠江守護職をめぐる斯波義達と今川氏親の戦いの様子を伝える永正九年（一五一二）閏四月三日の伊達忠宗軍忠状に、斯波勢を構成する引馬

衆・武衛衆・井伊衆の名が見える。引馬衆は引馬城に拠る大河内貞綱勢、武衛衆は、遠江守護職を回復しようとする斯波氏の直轄軍、井伊衆は、井伊氏など地元の国人・土豪の連合軍である（『静岡県史』資料編7、同通史編2）。このように、戦国期の古文書や記録には、しばしば地域の有力な勢力を示す語としての表記が見られる。

これらのことを参考にすれば、「をはた衆」・「はんた衆」の記述は、戦国の頃、小畑や半田（浜松市東区）の地域で勢力をなす人々が、富士参詣のために、富士宮の御炊坊に宿泊した事実を伝えているのではないか、と考えられる。

それでは、「をはた衆」の中核をなした氏族とは誰か。「をはた」は、先述のとおり、水窪町奥領家の小畑であり、中世、奥山郷を本貫地として勢力を張った奥山氏が想定される。

奥山氏は、南北朝時代、山香庄奥山郷であらたに勢力に伸ばした一族である。戦国時代の永正年間（一五〇四～一五二〇）には、今川氏親に服属し、惣領家から一族庶子が奥山郷の各地に分立していったといわれる（『遠江天野氏・奥山氏』）。

この「をはた」を本拠とする奥山氏の御子孫が、中世奥山文書を伝える奥山伸吾家である。同家の観音堂には、天正十四年（一五八六）の銘のある田楽面も伝えられていて、江戸時代、名主家として勢威を張った。

慶長・元和期の「道者帳」（『浅間文書纂』所収）には、元和二年（一六一五）六月三日の条に、

二人　同所之おくの山殿
　　此坊入百文

の記載がある。同所とは、前日の二日の「遠州之川のせ」の記述を受けているので、遠州となる。他の多くの記載と異なり、先達の名が見えない。

また、この「道者帳」には、先述の「をはた」や「をはた衆」の表記は見えない。

おそらく、「おくの山殿」とは、奥山郷小畑の奥山氏のことではないか、と考える。奥山氏の二人が一〇〇文を宿坊に収めて宿泊し、富士参詣を果たしたのであろう。

②子安神社の祭祀

水窪町小畑の諏訪神社北側に、子安神社が祀られている。『水窪町史』下巻（昭和五十七年八月）によると、

祭神は木花咲耶姫命。祭日十二月十四・十五日、祭主
奥山伸吾

とある。そして、その由緒として、

・元和八年（一六二一）仲祭十七日蔵用入立、鹿島大明神、お祭の様式深湯式方式、二ツ舞
・天和三亥年（一六八三）五月吉日、奥山善右衛茂家、高木平兵衛、平出武左衛門久正

・明治八年六月三十日より明治十年十二月二十六日迄、奥山家の神前に祭り、同日、北へ遷す。明治十七年三月九日、神鏡一面相添え、稲荷神社の下に遷す。奥山瀬作私有地に合祀。

と記す。

現在、神社の棟札や関連資料を拝見できていないので、詳細は明らかでない。

『水窪の民俗』は、『水窪町史』を引用して、子安神社の霜月神楽と二ツ舞の伝来を紹介する。

奥領家の坂本巌氏（昭和十年生まれ）によると、昭和四十年頃より、祭典が十二月十五日から十一月十五日に変更されたという。祭典日には、子安大明神と記す幟旗がたくさん立ち、幼子を背負い、安産祈願に訪れる女性たちが、御餅や御賽銭をあげて、たいそうな人出で賑わったという。地元のみならず、遠方からはるばる訪れる人も多かったとのことである。

萩原龍夫氏は、『巫女と仏教史』のなかで、奥山家祭祀の子安神社の子安神像を説明する。それによると、「木彫の女体で、気品の高い女神像は、髪をうしろに垂れ、豊かな乳房を赤子にふくませる中年の女性の姿にきざまれていた」とし、「姥神である」と記す。そしてまた、社殿に天正十二年（一五八四）以来の棟札数枚が蔵されていると記す。是非とも機会を得て、拝見したいと考えている。

③寛文の大日如来像

子安神社の境内の北隅に、石造の大日如来像二基が西向きに祀られている（写真2）。二基の大日如来像は、ともに智拳印を結ぶ金剛界大日如来である。向かって左側に安置された大日如来像の光背（表）を精査すると、

奉新造大日如来尊容一尊
寛文十三□□（癸丑カ）
八月吉祥日
願主小畑村□　□

の刻銘が認められる。寛文十三年（一六七三）八月吉日、小畑村の某が願主となって建てた石仏である。本来、智拳印は、胸の前にあげた左拳の人差指を右拳で握る形であるが、本像は、左右の拳が逆となっている。全体のつくりも、小ぶりである。一方の石仏は、蓮の台座に座し、正しい智拳印を結んでいて、尊容はより立派であるが、刻銘がない。

願意が見えないので、願いが一体何であったのか、明らかではない。しかし、富士浅間の御祭神を祀る子安神社の境内に安置されていることを考慮すれば、前述の富士垢離伝承地として挙げられている滋賀県甲賀郡や三重県度会郡などの、金剛界大日如来を祀る事例が参考となろう。そこでは、現世安穏・家内安全を願う人々が、現在も石仏を巡って富士垢離祭りや浅間山祭りを行う姿が示されている。富士講では、大日如来の周りを巡ると、富士参詣と同じ御利

益があると信じられている。

おそらく、旧暦六月の富士参詣月には、子安神社の大日如来の周りを、御利益を求めて巡る信者たちの姿があったのであろう。

写真2　子安神社脇の金剛界大日如来像（左の石仏の光背に銘あり）

三　佐久間町域の富士山信仰

（一）大井浅間神社の富士講

①一一町の町石

天竜区二俣より天竜川のダム湖に沿って国道一五二号線を北上すると、佐久間町大井の西渡で水窪方面への一五二号線と、佐久間方面への四七三号線とに分岐する。西渡は、水窪川が天竜川と合流する古くからの交通の要衝であった。北側には、浅間山と呼ばれる標高五四〇ｍの山が聳え、水窪川が山裾を巡って流れている。三角錐の形をなす神奈備型の山である。

水窪川で垢離をとった富士道者たちは、町石を頼りに、一一町の参道を登って山頂に着く。現在は、明光寺・間庄・城西方面への拡幅された自動車道が通り、山腹に残る旧参道は、数箇所で寸断されている。文化三年（一八〇六）六月、水窪川の川端に建てられた一町目の町石は、現在、三町目附近にあたる自動車道の脇に移されている。四角柱の表面に、

（右側）文化三丙寅六月吉日
　　願主　市左衛門
　　杉本氏
（正面）浅間大明神

山姥大権現
（左側）　是ヨリ十一町
第一町目　（竿高五七㎝×竿幅二四㎝）

とある。地元の杉本氏が、富士山の山開きにあわせ、山頂に鎮座する浅間大明神と山姥大権現への参道に、道標として建てた町石である。

西渡に住む藤沢春雄氏(大正九年生まれ)によると、杉本氏の縁者で御嶽教行者の庄八が富士山に登り、その功徳を村人に説いて働きかけ、整備したものという。傍らに、旧道から移された三町目の町石（総高四〇㎝×幅一七㎝）も立っている。

自動車道から分かれ、石英質の巨岩や緑泥片岩の砕石などが点在する山腹を登る。およそ傾斜三〇度の参道の傍らに、五町・七町・九町の町石が残る。九町目の町石は、台座も残っていて、各町石の規格が判明する。多くが失われているが、藤沢春雄氏によると、水窪の西浦石といわれた石材は、砥石として重宝されたためだといわれる。

神社拝殿の手前には、明治初年生まれの藤原代五郎が奉納した石灯篭（総高八〇㎝）が左右に立つ。一部、欠損し、コンクリートで補修されている。石段を登ると、ヒューム管製の鳥居が立つ。

拝殿の屋根下には、左より「浅間大明神」と記された扁額が掲げられている。神仏混淆の名残である。

②浅間神社の棟札

浅間神社の由来を伝える江戸時代の棟札は、現在、麓の貴船神社に保管されている。『佐久間町史』編纂の折、調査された棟札の資料（釈文）によると、慶応三年（一八六七）六月、山頂に祀られている浅間神社の火の用心に備え、八枚の棟札を貴船神社に納め置いたことが明らかである。

このなかで、最古の棟札は、寛文三年（一六六三）の札である。それによると、八月の彼岸の日、西村の神主の新兵衛が、郷中繁昌を祈って富士浅間大菩薩を勧請したとある。その後、本殿は、宝永元年（一七〇四）・享保二年（一七一七）・天明八年（一七八八）に造替されている。そして、享保五年六月、社参の利便のため、拝殿が設けられている。

宝暦五年（一七五五）七月の棟札に、神主の片切伊織が先達となり、天下泰平・国家安穏を祈り、富士浅間社に八楽尊・大日如来・姥神の石像を奉納したことが見える。八楽尊とあるが、八葉尊の誤りである。札の裏側には、「一之嶽延命地蔵　一金二朱也奉加」とあり、諸願成就・子孫長久を願う信心者の奉加により、造立されたのであろう。二之嶽以下、同じように、本地仏の名と奉加の金額が記されている。

③八葉九尊仏

寛政十二年（一八〇〇）六月、富士吉田口で山室を営む檀徒の和光氏（御子孫の和光弘氏は、現御殿場市在住）の需めに応じ、甲南（甲斐）新倉郷（富士吉田市）の大原山如来寺大縁浄因が記した「富士山縁起」によると、富士山頂の宗教世界を「峯者五仏四菩薩の所座、八葉九尊の体也」と記す。これは、大日如来を中心仏とし、周りに四仏四菩薩を配する胎蔵界曼荼羅中台八葉院の世界を記している。寛政十二年は、富士山御縁年にあたる。

富士山頂の宗教世界について、天保四年（一八三三）六月の「奉唱富士山」（『静岡県史』資料編十五　近世7）を見ると、

富士山表口禅淖開山神変大菩薩惣本尊浅間大菩薩、両府大日如来壱千弐百余尊、ぜつちやうたいぞう八よふまんたらさんぎさんげ、六根せう〳〵　おしめニ初たいこんこふとうじふし浅間大日如来壱しゆ来ます

壱之嶽ニハ　天照皇大神宮本地延命地蔵大菩薩
弐嶽ニ者　熊野三所大権現本地あミた如来
三ノ嶽ニ者　伊豆大権現本地たいせいくわんせ音菩薩
四ノ嶽ニ者　白山明利大権現本地釈迦無尼如来
五之嶽ニ者　「日吉」（追筆）鹿嶋山王大権現本地みろくほさつ
六ノ嶽ニ者　鹿嶋大明神本地やくし如来
七ノ嶽ニ者　箱根大権現本地文殊菩薩
八ノ嶽ニ者　三嶋大明神本地宝勝如来

とある。「ぜつちやうたいぞう八よふまんたら」は、「絶頂胎蔵八葉曼荼羅」である。山頂に中心仏として胎蔵界大日如来を配し、火口の八つの嶽に本地仏と垂迹神を配する宗教世界が明らかである。

浅間神社拝殿の周りに残る石仏群は、浅間大明神を大日如来と見立て、その周りに八体の石仏を配して、曼荼羅の世界を具現化した名残である。富士山登拝では、いわゆるお鉢巡りが行われたが、信者たちは、富士講の折に、拝殿の周りをお鉢と見立てて巡ったことであろう。

中心仏たる胎蔵界大日如来の石像は、おそらく本殿内に安置されたと思われるが、確認できていない。一部、不明の石仏もあるが、殆どの石仏の光背部には刻銘があり、「奉唱富士山」に記された嶽々の本地仏と対比できる。一の嶽の延命地蔵（写真3）の刻銘には、「宝暦五亥年立之」とあり、宝暦五年に八葉尊・大日如来・姥神の石像を奉納したと記す棟札の記載と合致する。

石仏は、拝殿の周りにお鉢に見立てた土盛の上に安置されているが、一部破損や倒壊したままの状態のものもある。永年の風化による痛みのほか、殆どの石仏に顔面破損や折損などが見られることは、明治初年における廃仏毀釈の名残でもあろうか。

表1は、石仏の光背部に刻まれた銘と現況をまとめたものである。

表1　宝暦五年建立石仏の刻銘と現況

石仏番号・銘	法量・現況
①嶽延命地蔵 宝暦五亥年立之	像高三七㎝（像のみ高三四㎝） 顔面破損。拝殿左側の土塁上に立つ。
②嶽阿弥陀	像高三九㎝（像のみ高二五㎝） 拝殿左側の土塁上に立つ。
③嶽観世音	像高四六㎝ 顔面破損。拝殿左側の土塁上に立つ。
④嶽釈迦牟尼	像高四一㎝（像のみ高二三㎝） 拝殿真裏の土塁上に立つ。
⑤（嶽弥勒カ）	破損して、倒壊。刻銘不明。
⑥嶽薬師	像高四三㎝（像のみ二三㎝） 顔面破損。拝殿右側の軒下に倒壊。
⑦嶽文殊	像高四六㎝（像のみ二五㎝） 像の半分で折損。拝殿右側の土塁上に立つ。
⑧嶽宝勝	像高三四㎝ 像の半分で折損。拝殿右側の土塁上に倒壊。
姥神	像高四九㎝（像のみ二五㎝） 拝殿裏側、石垣上に立つ。

一部、正福寺（富士吉田市）版「八葉九尊図」と仏名が異なる。拝殿の裏側、石積の上に姥神の石像が祀られている（写真4）。これは、萩原氏が説くように、古くからここが安産・子育信仰の場として山姥権現が祀られていたことを伝える。

図1は、「奉唱富士山」の記述を参考に、一の嶽から八の嶽に配された石仏のもとの位置を復元したものである。

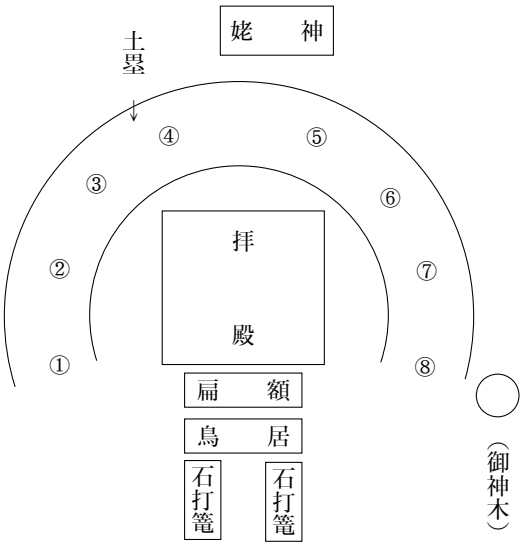


図1　石仏の配置復元図（①～⑧の数字は、表1の石仏番号を示す）

写真3　宝暦五年建立の延命地蔵像

写真4　宝暦五年建立の姥神像

年の富士浅間大菩薩の勧請が機縁となったのであろう。その後、享保五年の拝殿設営、宝暦五年の石仏奉納、文化三年の町石奉納、と次第に整備されて人々の信仰心は高まりをみせ、講が盛んに行われていったと考えられる。

藤沢春雄氏は、昭和十五年に軍隊に召集される前、富士講を体験した貴重な経験を持つ。氏によると、七月十五日、大井橋の下、水窪川のほとりに幟旗が立ち、信者たちは川で垢離をとる。一升ビンに水を汲み、提灯を持って一一町の参道を登る。山頂では松明を焚き、そのさまは盛大であった。富士山登拝と同じく、女人禁制である。拝殿では、村人の安泰を祈って神主が祝詞をあげ、信者は酒を飲み、朝まで参籠して楽しんだという。平成十六年まで、山の上で祭典が行われたが、以後、山裾の貴船神社の祭典に先立ち、九月の第二日曜日に祀っているとのことである。

朝までの参籠は、富士山が庚申の年に一夜にして湧出したとする富士山の縁起と関わる。庚申講の時のように、信者たちは、楽しみの一つとして、夜が明けるまで酒を飲みかわし、世間話に花を咲かせたことであろう。そして、明け方には、富士山登拝と同じく、東方に向って御来光を拝み、村の繁栄を祈ったのであろう。

（二）福沢の富士山信仰

④富士講の伝承

かつて浅間神社では、地域の人々によって、富士講が行われていた。その起こりは、棟札にもあるように、寛文三

①元和三年の富士参詣

佐久間町福沢の集落は、標高一三五一ｍを数える龍頭山の北西側、水窪川左岸の、陽当たりの良い山の斜面に分布する。上・下の地区に分かれて人家が点在する。

集落の歴史は古く、鎌倉時代末の地頭天野氏の内紛があり、応永年間には、天野氏と新興の奥山氏が、その支配をめぐって争った所として知られる。

福沢の富士山信仰に関しては、「道者帳」（『浅間文書纂』）に記録がある。それによると、元和三年（一六一六）六月五日の条に、

五人　遠州の内おくノ山ふく沢ノ　　久左衛門殿
　　此坊入二百文

とある。福沢の久左衛門に率いられた五人の村人が、富士参詣に出掛け、富士宮の宿坊に二〇〇文を納めて宿泊した時の記録である。久左衛門に先達の文字が冠されていないが、おそらくリーダー的役割を果たしたことであろう。

②富士大日の祭祀

福沢の氏神である諏訪神社の脇に、「富士大日」と呼ばれる大日如来が祀られている。「富士大日」の称呼は、富士山信仰の名残を留めていよう。平成五年の「奉祭大日如来遷宮」と記す木札が納められている。

藤沢謙次郎氏（昭和十四年生まれ）によると、大日如来を祀るもとの屋敷は、藤沢家裏側の堂と呼ぶ高台にあり、幕末の頃に火災に遭って堂が消失。平成四年（一九九二）に諏訪神社が建設された折、その脇に再建されたのだという。

謙次郎氏は、藤沢家の第一九代目の当主で、寛文八年（一六六八）正月の銘がある墓石を初代の墓として祀る。「ニュウヤ」の屋号をもつ藤沢家は、代々山伏を勤めてきた家柄である。初代が空海の尊像を迎え入れ、以後、真言・曹洞両宗の仏壇を祀っている。氏は、真言宗醍醐派の龍頭山戒光院の先達を勤め、平成五年一二月、大日堂のもと屋敷に地之神愛宕神・若宮霊神の社頭を建て、御嶽教の教義によって鎮座祭を行っている。

前掲の道者帳に見える久左衛門は、どのような家系の人物であったか、明らかではないが、藤沢家の歴史を考慮すれば、あるいはその先祖にあたる人物であったのかもしれない。

福沢の集落を下ると、一心滝と呼ばれる滝がある。この滝には、子安・子育てに関わる山姥の伝説がある。福沢には、富士講の伝承はないというが、おそらく、道者たちは、この滝で水垢離をとり、大日堂へと向かったことであろう。

（三）半場の富士山信仰

半場の神妻神社本殿の東脇に、境内社の八十宮神社が鎮

座する。

『静岡県神社誌』によると、八十宮神社の御祭神は十五柱の神で、そのうちの一柱が木之花佐久夜姫命である。月花ふみ子氏によると、昭和二十年代に、御神木で鞘堂を建てたとのことである。

神妻神社と八十宮神社との間に、石の小祠が祀られ、その傍らに「二丁」と刻まれた町石が建てられている。また、神妻神社本殿の隣にも、「十一丁　當国島中村」「十四丁　當国半場村」などと刻む町石が集めて建てられている。これらの町石が、いかなる由来をもつものであるのか、明らかでない。

戦前、神妻神社は郷社の社格を有し、境内は杉の大木で覆われている。月花家は、代々神主を勤め、かつて広い境内の一角に屋敷があったという。

神社の裏山が浅間山である。標高八五四ｍの山頂に、石の祠が祀られているとのことである。森林地図によると、山頂に「浅間」「浅間越」の地名が見える。

おわりに

北遠地域では、急激に過疎化や高齢化が進み、各地に限界集落が生まれている。これにより、地域に伝わる伝統行事が断絶したり、貴重な文化財が存続の危機に瀕しており、対策が求められている。

富士山信仰の研究において、文献資料は限定されていて極端に少ない。かつて行われていたであろう富士講も、経験者がいなくなり、後継者も得られていないなど、きびしい状況下にあり、その復元は容易でなかった。

しかし、僅かな文献資料をもとに、神社の棟札や石仏、伝承などを頼りに調査し、不充分ながらも、存在の明らかな富士山信仰の概要をまとめることができたように考える。

春野町においては、富士宮の村山三坊のうち、辻之坊との関わりが見られたが、水窪・佐久間においては、坊との関わりを明らかにすることができなかった。また、北遠の地域には、安産・子育に関わる山姥信仰がある。萩原龍夫氏の研究は、全国的な規模の中で、北遠の山姥信仰の特色をとりあげている。本稿では、富士山信仰の観点から、北遠における山姥信仰との関わりについては、深く触れることがなかった。これらは、今後の課題としたい。

本研究にあたって、郷土の歴史に明るい佐久間町間庄の伊藤賢次氏からは、全般にわたる多大な御支援・御協力を、かつて『佐久間町史』の編纂にあたられた佐久間町中部の平賀孝晴氏（昭和八年生まれ）からは、多くの貴重な資料を提供していただいた。また、奥山清氏（昭和一五年生まれ）が会長を勤める奥山会の皆さんの活動成果によるとこ

ろも大きく、地域の聞き取りにおいては、多くの方々の御世話になった。改めてあつく御礼申し上げる。

参考文献

静岡県編『静岡県史』資料編15　近世七（平成三年三月）
静岡県編『静岡県史』資料編7　中世三（平成六年三月）
静岡県編『静岡県史』別編1　「民俗文化史」（平成七年三月）
静岡県編『静岡県史』通史編2　中世（平成九年三月）
富士宮市教育委員会編　『村山浅間神社調査報告書』（平成一七年三月）
富士山浅間神社編『浅間文書纂』所収「公文富士氏記録　三　御炊坊道者帳写」・「公文富士氏記録　五　道者帳」（昭和六年）
春野町史編さん委員会編『春野町の社寺棟札等調査報告書』（平成五年二月）
春野町史編さん委員会編『春野町史』資料編一（平成六年一月）
春野町史編さん委員会編『春野町史』通史編上巻（平成九年三月）
河村義忠「砂川　高塚山　富士浅間と木像」（春野町郷土研究会編『温故知新』一〇号　昭和五一年）
水窪町史編纂委員会編『水窪町史』下巻（昭和五七年八月）
佐久間町史編纂委員会編『佐久間町史』上巻（昭和四七年三月）
佐久間町史編纂委員会編『佐久間町史』編纂資料（昭和四〇年代）
佐久間町教育委員会編『佐久間町の伝統文化伝承総合支援事業調査報告書』（二〇〇一年三月）
静岡県郷土研究協会編『静岡県神社誌』（昭和一六年七月）
遠州常民文化談話会編『水窪の民俗』（平成二四年一〇月）
國學院大學博物館編『富士山』（平成二六年九月）
萩原龍夫・千葉徳爾「山地住民における宗教文化の展開過程」（『明治大学人文科学研究所紀要』別冊8　一九八八年五月）
萩原龍夫『巫女と仏教史』―熊野比丘尼の使命と展開―（昭和五十八年六月）
鈴木将典編『遠江天野氏・奥山氏』（二〇一二年三月）

（平成二十六年十一月二十日脱稿）

（追記）平成二十七年一月、滋賀県甲賀市を訪ね、市史編纂室長の米田実氏の御厚意により、市内各地に残る富士浅間大日の石仏を拝見することができた。改めて御礼申し上げる。